



お話をうかがったのは…

長尾クリニック院長

長尾和宏(ながお・かずひろ)さん

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業後、大阪大学第二内科入局。95年尼崎市で開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療をめざす。医学博士。日本慢性期医療協会理事。日本尊厳死協会副理事長。日本ホスピス在宅ケア研究会理事など。近著に『糖尿病と膵臓がん』『痛くない死に方』『痛い在宅医』(ブックマン社)など多数。

▷尼崎市昭和通7-242

☎06-6412-9090

やさしい介護 -149-

「在宅介護」を考える

取材・文/上村悦子 イラスト/清水みどり

病院で最期を迎える人が多い一方で、国策として「在宅介護」が進められつつあります。ただ、これまでに在宅介護は美談として語られがちで、真実はなかなか見えてきませんでした。介護される本人も、家族も、納得できる真の在宅介護とは、どういうカタチなのでしょう？ 現在公開中の映画「痛くない死に方」から、そのヒントを探ってみませんか？ 原作者である長尾和宏医師にお聞きします。

「在宅介護では、医師との信頼関係がもつとも重要です」

長尾クリニック(尼崎市)を開業以来、積極的に在宅医療に取り組み、これまでに約2500人を看取ってきた長尾和宏さん。

「私たちの看取りでは、みなさん、苦しみの痛みもない平穏死、尊厳死です。ただし在宅医療は、経験のないまま参入する医師もいて、正直言って玉石混交。在宅医療が成功するかどうかは、医師の技量はもちろん、訪問看護師やケアマネの技量に大きく左右されます」

制約の多い病院や施設ではなく、住み慣れた家で自由に過ごせるのが、最大の利点だという在宅介護。特に医師の技量が影響するのが、痛みを取る「緩和医療」や、「過剰な治療をしない終末期」です。

「穏やかな死へのプロセスは、自然に食欲がなくなり枯れるように死んでいくこと。これが平穏死です。そのプロセスを妨げるのが点滴や栄養補給などの過剰治療。それらがかえって本人を苦しめることは、医療者にもなかなか伝わりません」

長尾医師は、在宅医療のあり方を根本から問うのが、公開中の映画「痛くない死に方」だといいます。

「これまで死に関する本を多く書いてきて、今回の映画はまさに集大成です。私の講演を聞かれた高橋伴明監督から映画化のお話をいただき、脚本を読んだ驚いたのが、私が伝えたいことが網羅されていたこと。感謝の一言です」

映画では「生きることは食べること」「待てる医者になれ」「カルテでなく人間を見る」など、在宅医療のカギとなるフレーズが飛び交います。

「高齢者医療、終末期医療は生活の質が大事。マニュアルどおりではなく、その人の人生を見るところです。もう余命いくばくもないのに、死ぬまで抗がん剤治療をしたり、20種類以上の薬を飲ませたりする医者がばかりではおかしい。私の目標は医療のあり方を根底から変えること。映画を医師や医学生にこそ観てもらい、議論を巻き起こしてほしいです」

長尾医師が在宅医療で最初に行うのは、趣味や仕事などその人の歴史をつくり聞けること。そこから距離が縮まり信頼関係が生まれます。納得のいく在宅介護を始めるには、こうした医師探しが私たちの課題のようです。

また映画では、自分の最期はどうありたいのか、家族に伝えて話し合う「人生会議」※や、自分の意思を表明しておく「リビングウィル」※の大切さを伝えるシーンも心に迫ってきます。

「多くの人が自分のこととして死を意識したコロナ禍だからこそ、映画を通して、生きる意味や死に方をあらためて考えるきっかけにしてほしいです」

※「人生会議」…(ACP)アドバンス・ケア・プランニング)という医療やケアを望むかなど、家族や信頼する人たちと何度も話し合って決めていくこと。

※「リビングウィル」…人生の最終段階(終末期)を迎えたときの医療の選択について、事前に意思表示しておく文書(日本尊厳死協会発行)。

映画「痛くない死に方」

在宅医療に従事する若き医師・河田は、末期の肺がん患者・大貫の在宅医となる。延命治療を病院で続けるよりも、住み慣れた家での静かな看取りをと、娘の智美が選択してのことだった。しかし結果、大貫は自宅で苦しんで最期を迎えることに。病院から連れ戻した自分が父を殺したと苦しむ智美。自分の診断ミス責める河田は、先輩医師の長野を訪ね、往診に同行しながら在宅医としてあるべき姿を学んでいく。2年後、再び末期の肺がん患者を担当することになるが、「痛くない死に方」はかなうのか。



©「痛くない死に方」製作委員会

●3月5日(金)からなんばパークスシネマ、テアトル梅田、神戸国際松竹、3月12日(金)から塚口サンサン劇場、豊岡劇場、4月2日(金)からMOVIXあまがさきほかで公開。

併せて観たい

製作委員会



「けったいな町医者」

「痛くない死に方」の助監督を務めた毛利安孝が、原作者の長尾和宏医師の日常を2か月間カメラで追ったドキュメンタリー映画も同時期に公開予定(※公開初日は異なる)。ナレーションは柄本佑。116分。●2月26日(金)から神戸国際松竹、なんばパークスシネマ、3月5日(金)から塚口サンサン劇場、3月20日(土・祝)から第七藝術劇場ほかで公開。



2021
APRIL

本体255円+税

2021年3月10日(毎月10日発行)通巻390号

ステーション4

特集

今年のお花見は、近くの公園が、いいね！

桜咲く公園で、 お花見ランチ！

待ちに待った春！桜の便りを楽しみに、ご近所の公園に出かけてみませんか？
お弁当を持って行ったり、テイクアウトを利用したり。
近くのお店に立ち寄って、ゆっくりランチするのもいいですね！
春らんまん、桜舞う公園で、心やすらぐひとときを。

特集

心のこもった、ふるさとの味を見つけに！

道の駅へ！ おいしいドライブ

松本紗智さんの、
ソースのまとめづくりで、
ラクラクごちそうごはん！

枝元なほみさんの、
丹波黒さや大納言小豆クッキング



ホームページ <https://station.kobe.coop/>

ご意見・ご感想と定期購読のお問い合わせは
編集室直通ダイヤル ☎078・842・3636
受付●10:00～17:00(土・日・祝を除く)

